

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

(2)

石原 昌家

1970年3月15日、大阪万国博覧会が華々しく開幕した1週間後、コザ市(現・沖縄市)山里の国際大学に勤務するため、私は8年ぶりに沖縄で生活することになった。

新聞を通してしか社会の動きを知ることができなかった。さっそく、琉球新報と沖縄タイムスを読み始めた。1週間もたない3月26日、両紙が一斉に「赤松氏来島問題」を報じた。

赤松氏来島事件

「真相」追う旅の始まり

「集団自決」責任で紛糾

「赤松氏来島問題」を報じた。琉球新報は朝刊9面で「赤松元大尉慰霊祭を機にきよう来沖」/戦友の霊とむらう/渡嘉敷島の集団自決、論議再燃か」という見出しを掲げている。私は、帰沖直後にいきなり沖縄戦体験の認識をめぐって相対立する問題と戦争責任の深刻な問題が浮上したことを知った。

住民の認識

琉球新報の記事によると、沖縄戦当時、渡嘉敷島駐屯海上挺身隊第三戦隊隊長・赤松嘉次氏(50)が戦友15人と遺族3人で3月28日の白玉ヶ塔前の慰霊祭に参列することになり、27日に訪沖することになった。1945年3月28日に渡嘉

にも「事実を反することがいろいろいわれ、そのせいで村民の方たちも一致して迎えない事情があると思う。そっとしてほしい」と述べたという。赤松氏が訪沖を村に申し出て、渡嘉敷村遺族会会長でもある玉

井喜八村長は、「あれから25年にもなった現在、個人的にはいろいろあろうけれども、だがあの問題を犯したということではなく、素直に慰霊させた方がよい」と報じている。

記者会見が行われた。琉球新報30日朝刊7面に「真相はほかにある!渡嘉敷島の集団自決/命令は下さなかった/私も責任が」/赤松元大尉 抗議を背に帰途へ」と、トップ記事で記者会見の1問一答が載っている。その一部をピックアップする。

「一方では米軍の要求で投降を勧告してきた男女6人を斬り殺し、住民の何人かも

「赤松氏 翌20日朝聞いたが、早まったことをしてくれたと思った。その自決に追いやった責任をどうとったのか。」

スパイの疑いをかけて斬り殺したという。「沖縄の遺族の憎しみを一身に受けている赤松氏だが、その後の週刊誌や琉球新報では『集団自決は私が命令したのではない。スパイ容疑で殺したの。気の毒だが当時の状況からやむをえなかった。住民に対してうしろめたい気持ちはひとつもない』と話し、再び遺族や関係者との深層をめぐる対立していた」と、赤松氏訪沖以前のインタビュー記事を載せている。

「赤松氏 翌20日朝聞いたが、早まったことをしてくれたと思った。その自決に追いやった責任をどうとったのか。」

命令下さなかった

渡嘉敷島元戦隊長の赤松嘉次氏の来島を伝える1970年3月27日付琉球新報朝刊

集団自決 命令しなかった



赤松元大尉が来沖

基地沖繩

基地沖繩

真相はほかにある!

命令は下さなかった



赤松嘉次氏の記者会見を報じる1970年3月30日付琉球新報朝刊の記事「真相はほかにある」の発言の裏に大きな問題があることが、後に明らかになっていく

「私にも責任が」

「赤松氏 抗議を背に帰途へ」

「赤松氏 翌20日朝聞いたが、早まったことをしてくれたと思った。その自決に追いやった責任をどうとったのか。」

「赤松氏 翌20日朝聞いたが、早まったことをしてくれたと思った。その自決に追いやった責任をどうとったのか。」